

序文

「世界の公明正大さに従い、私に観客を与えよ」

「ジョン王」 第五幕・第三場

大体において私は序文なるものを軽視している。もし著者が二―三〇〇頁を費やして読者の心を捉えることも、対象を明らかにすることもできないのであれば、おそろく五〇行でも同じことであろう、と思ってきた。しかし舞台の裏側について少しばかり語ることの誘惑は昔も今もとても強く、書き手はこれに抵抗することができない。私も試みようとは思わない。

私はマラカンド野戦軍に所属していた時、ロンドン・デイリー・テレグラフに一連の書簡を書き送った。これらの書簡が好評を博したことに励まされ、私はさらに多くの仕事を企てた。この本はその成果である。

私は元の書簡をバラバラにして、自由に、適切と思われる一節、フレーズ、事実を活用することにした。それらに含まれる見解は変わっていないが、キャンペーンの爽快な空気の中では穏やかに見えたいくつかの意見や印象は、平時のより温和な雰囲気に合わせて修正した。

私は多くの勇敢な将校たちが私の取材に協力してくれたことに感謝しなければならない。彼らはみな自分の名前を出さないようにと頼んだ。しかしその希望に添うならばマラカンド野戦軍の物語からその全ての最も勇敢な行動と最高の登場人物が奪われてしまうことになるであろう。

この本は辺境問題の複雑さを取り扱うつもりはなく、その局面と特色の完全な要約を示すものでもない。最初の章で私はインド辺境の人口が多い有力な種族の一般的特色の説明を試みた。最後の章で私は平凡な人間の知性を、それはこの主題においては記憶を当惑させ、忍耐力を疲弊させるほど巨大なのであるが、膨大な量(*the vast mass)の鑑定に用いることを試みた。その他は物語である。そこではただ自分が見えたものをそのまま読者にお見せしようと思っっている。

私は生起した行動と勇氣のすべての事例を本文に記述することができなかったため、付録に公式デイスパッチを付けた。(＊デイスパッチ・・・通信、報告書、公文書＊未訳)

私が帝国の大問題について政党のパンフレットに書いたことによってイギリス国民を侮

辱してはいないことを、少なくとも公平な評者は認めるであろう。いかなる人物や方針にも反対を唱えようとせず、私は発生した事実と浮かんた感想をそのとおりに記録したのである。実際のところ、私は誰も攻撃しないことですべての人の気分を害したのではないかと心配している。中立は不名誉な孤立へと墮するかもしれない。真実を見極めるための正直で偏見のない試みだけが私の唯一の防御策である。なぜなら読者の信用を得ることこそが終始私の主な願いであったし、結局それが私の唯一の支えになる可能性があるからである。

ウィンストン・S・チャーチル

騎兵隊兵舎にて

バンガロール、一八九七年一月三〇日